

創刊五周年第三〇号記念八雁賞

受賞作

麦の一粒

工藤 貴響

見通しを街なみはつる信号機あおく点せば道ほそく見ゆ

同期生なべて留学せしのちを日本に夏の氷を嘗むる

両の手に包む蓮はちすのやわらかき蕾は肉のごとくに緊まる

蓮池の夕闇せまるそのまなか閉じ遅れたる一輪が見ゆ

お互いの親のことなど話しつつ樺太シシャモの銀食^{しろがね}いき

眠りより起きて畳みし蒲団の前しばらく君は立ちつくしあり

大きな肩より提げて階段の夏の日差しを降りゆく君は

〈文学〉の名称のこる大学へ移り入りゆく而立のすぎて

友の亡き七年^{ななとせ}過ぎしフランスへ戻りて住むを否むころは

絶ちゆきし生あんのんとわが裡に住まえるごとしこの七年は

シリアびとらの聴かせぐれにし楽音の思い出で来も朝明あさけの椅子に

民族という闘争の言葉もて議論交わしき避けがたくして

地に落ちて死なざる麦の一粒のごとくに床ゆかにからだ伸べたり

打ち上げの花火つぎつぎに落ちゆくを見つつ思えりテロルの仕組

黒暗の空は華やぎたましいの短きひかりを曳きおろしたり

道のべの蔓草ひと群吹きあぐる地下より生るるぬるき空気は

熱かえす舗装路の上に散りぼえる百日紅の花くるしくないのか

ビル越えて現れ来たる雨雲の秀^ほを立たせつつ夕日は差せり

素麺の束投げ入れし鍋のなか湧き来る白き湯をおそれたり

部屋内をあらわしめつつ乱れたる床の書冊はひかりをのせつ

受賞のことば



全国大会の日、選考経過を述べる島田さんから名前を呼ばれたときは、とても驚きました。八雁創刊から五年。この五年は、短歌に真面目に取り組もうと決めた年でもありましたが、実は、辛うじて欠詠なく続けたが、実は、辛うじて欠詠なく続けたが、実は、辛うじて欠詠なく続けたが、

れながら、自分の心に向き合おうと決めました。作品をまとめてみると、それまでは考えていなかった課題（詠いぐせや発想の傾向）が見えてきたように感じます。それが大きな収穫でした。十月からはフランスの大学院に通います。日本語から離れるこのタイミングで八雁賞をいただいたのも、短歌との縁かもしれません。ヨーロッパの地で文語短歌を作る落差を自分なりに考えながら、日々の経験を大切にして歌を作っていきたいと思います。

次席 片 白 草

藤井 玄

桜蕊降りつぐ中を鼓笛隊「桜まつり」の旗掲げ来る

家壊すにほひの中の葦草パワーシャベルのキャタピラの際きは

襟首にふりてやまざる棕櫚の花鋸のししやうをもて棕櫚を伐るとき

庭草のひまに落ちたる杏の実ず饅えゆく時をあまくにほへる

更けにけりタンホイザーの終はりけりまだ剥き終えず辣蕪の皮

手のひらにふたつ灯りし螢火のひとつは高く昇りゆきけり

青梅の臍へそ除りながら六月の半ばに近き昼過ぎにけり

晴るるらし櫂の上の中空を夏の燕の飛び交ふが見ゆ

旋盤の油の匂ひなつかしき町の工場に立葵咲く

雪せつ加鳴きまた鳴き高く飛びたちしのちを水面に夏の日が照る

またひとり逝きたる知らせ聞いてゐる片白草のそよぐを見つつ

踏み石に草木瓜くさぼけの実と蝶の羽根落ちてありけり夏の白昼

櫨の樹の茂りを洩るる夏の陽は庚申塚の石にかがよふ

「生きていて、いいの？」

近藤 優樹

始発前のしずけさのなか日を受けてひかり放てる軌条^{レール}見ており
顎に生うる髭を指もて抜きたれば可燃ゴミとて机に散れり
「害」かいや「碍」かと内に問いたれば「障がい」と書く選択をせり
生徒に^{むか}対い朝のあいさつ促せば手でもて己が義眼を打てり
十四年かけて覚えし「おはよう」を生徒は叫びつつ廊下這いたり
発語なき生徒に近寄れば我の手を握りて上に下に振ったり
「生きていて、いいの？」と我に生徒は問えり尿染^{しと}む下着を
取り替える時

日なた

遠藤 知恵子

そうだ明日、湧き水さわりに行きたいな などと思つたあかるい窓べ
美しいものが見たくてひらく本 こわれたみたい 文字が読めない
活版の印字のくぼみに指を添え一文字ずつを目に映し込む
読み進めても単語にならない文字の群れ 頭のなかがばらばらになる
打ち明ける勇気がないなら感情の奴隷となつて泣けばよかった
レシビ忘れたコックみたいだ未調理の気持ち胸にほつたら
かしだ

タオルケットあぐまでかけてまひるまの日なたのにおいをかんじて眠る

わが疑えり

大川 智子

ひつたりと抱かれし昨夜^{いだ}のワンピースまといて君の香のなか
にいる
くさはらの庭^{にわ} 石 菖^{せきしょう}の青き踏み風に吹かれにわが歩み出づ
千の枝分かてる樺^かその幹に燃ゆる生命^{いのち}か太陽しずむ
沈みゆく陽のひかり満つるくさはらにもろ手を伸べて風を受けたり
ストッキングに脚おしつめて出勤す働くことはかくも苦しき
六月に父を亡くせし子のテスト不合格にて「ファイト！」印押す
答案に向かうおもてに髪かかる風吹けば揺れまたしばし揺る

熊本大地震——走る

新地 浩一

火の国に起こりし地震^なの被災者を救援せんとてナースら走る
ナースらに水・食糧を持たせんと吾も走れりキャンパス内を
Dr. Helicopter^{ドクヘリ}は肥前の空を飛び交えり重症患者救命せんと
手術着^{スクラフ}をナースに託し見送りぬよく目の見えぬ医学者われは
賞味期限二〇三三年のビーフシチューを六〇人分
眼を病みて支援にゆけぬ医師われは留守居役にて電話機見つ
める

希望という希な望みを繋ぎつつ生存者探すシヨベル駆使して

意欲的な作品群

阿木津 英

第一位に「日なた」、第二位に「麦の一粒」、第三位に「片白草」「熊本大地震——走る」の二篇を推薦した。「日なた」は、幼女陵辱という、じつはよくあるはずの、しかし誰も語り出さない事象に幼女の位置に降りて言葉を与えようというもの。勇氣ある言語行為で、切実なひりひりとした感じが伝わってくるが、冒頭三、四首、歌が事柄の説明でしかない。きわどい内容だけにそのマイナスが大きく響く。現在の位置からの批評性も必要。だが、失敗は良い。己を晒さずして何の文学的行為ぞ。

「麦の一粒」は、身近な場所からグローバル化した現代の深刻な問題に触れる若者らしい抒情歌。ことに〈道のべの蔓草ひと群吹きあぐる地下より生るるぬき空気は〉へ素麵の束投げ入れし鍋のなか湧き来る白き湯をおそれたり〉は秀逸だ。前半部分、たとえば〈両の手に包む蓮のやわらかき蕾は肉のごとくに緊まる〉の「やわらかき」と「緊まる」の齟齬など、歌の統一感がいま一步、一方でまとまり良く作ると大味になりがちという難はあるが、「日なた」に劣らぬ作品だ。「片白草」は、歌のうまい作者。〈襟首にふりてやまざる棕櫚の花 鋸をもて棕櫚を伐るとき〉〈青梅の臍除りながら六月の半ばに近き昼過ぎにけり〉〈雪加鳴きまた鳴き高く飛びたちしのちを水面に夏の日が照る〉〈檜の樹の茂りを洩るる夏の陽は庚申塚の石にかが

よふ〉など、成熟した歌の良さがあり、ことにも「雪加鳴き」の歌には響きがこもる。ただし、〈弾き終えてハープの弦をゆつくりと指は離れてゆけり春宵〉の結句「春宵」の付け方に顯著にあらわれているように、言葉の巧みを狙いすぎてやり過ぎがしばしばある。「熊本大地震——走る」は、熊本大地震に遭遇した近隣県医療従事者としての緊迫感ある一連。たんにドキュメントではなく、「眼を病みて支援にゆけぬ医師われ」としての生の地点が交錯して、ふくらみのある佳品。後半が少し散漫になって、繰り返しの感じのあるのが残念だった。

真面目で丁寧な歌

高橋 則子

「麦の一粒」は文学として意識的に自分の世界を創っていうという意欲を感じさせる作品である。〈同期生なべて留学せしのちを日本に夏の水を嘗むる〉〈文学〉の名称のこる大学へ移り入りゆく而立のすぎて〈地に落ちて死なざる麦の一粒のごとくに床にからだ伸べたり〉と文学を志す者の不安と覚悟の入り混じったそれぞれ違う見方の三首を一連の中に配置し、一つの纏まりのある作品として構成している。〈大きかばん肩より提げて階段の夏の日差しを降りゆく君は〉と物語のような歌で、君の姿の全体を包むような眼差しと情感は一連の中に明るい雰囲気を与え魅力がある。友人の歌は明確ではないが、「フ

ランス」「シリアびと」「民族」「テロル」と連想的な繋がりを持たせ、自らの具体を通して現代の問題を暗示させる。〈道の蔓草ひと群吹きあぐる地下より生るるぬるき空気は〉この歌はいい。人工的な空気に蔓草が煽られ、一つの憂鬱感が言わずして感じられる佳品である。次席「片白草」は歌の上手い作者で、特に場面設定が良い。〈家壊すにほひの中の董草パウシャベルのキャタピラの際〉〈青梅の臍除りながら六月の半ばに近き昼過ぎにけり〉〈雪花鳴きまた鳴き高く飛びたちしのを水面に夏の日が照る〉など鋭く切りとられてある。候補作「生きていいいの？」は真っ直ぐ丁寧に歌っている。特に仕事の歌が良い。〈害〉かいや「碍」かと内に問いたれば「障がい」と書く選択をせり〉〈幹として水中に立つ親に身を沈められたる生徒抱きて〉障がいのある生徒を感傷的でも傍観的でもなく直接自分に関わる切実さをもつて歌っている。候補作「わが疑えり」は氣どりがなくいかにも軽やかである。〈くさはらの庭石 菖の青き踏み風に吹かれにわが歩み出づ〉〈答案に向かうおもてに髪かかる風吹けば揺れまたしほし揺る〉こうした身体を通して自然を感じている歌に魅力がある。

一首と二十首

島田 幸典

「麦の一粒」は、屈託を抱えた目に映るさまざまな光景を造型的に再構成し、そこに心理的陰影を投影させるところに特色がある。四首め〈蓮池の〉は一見すると自然描写の歌だが、四

句「閉じ遅れたる」には寓意的な含みも感じられる。五首めから「君」と呼ばれる人が現れるが、「樺太シシャモの銀」や「大さかばん」など印象的な細部とともにその存在を言葉に刻みつける。八首めから外国文学研究者として学問に携わる日々が省みられる。「文学」「而立」「民族」「闘争」という観念語を大胆に、しかしそれなりに実感的に、身体を潜らせて使って浮きたっていないのは、この作者の長所である。標題歌〈地に落ちて死なざる麦の一粒のごとくに床にからだ伸べたり〉は、十八首めの〈ベル越えて〉と同じく文語を用いて、調べは丈高い。かと思えば十七首めの〈熱かえす〉では結句に口語表現を織りこむなど、単調を避ける配慮がある。さらに複数のモチーフをパランスよく織りまぜ、連作を横に読ませる構成力がある。他方で句切れや接続助詞、動詞など言葉の使い方に癖があり、表現においてなお詰めるべき余地はあった。だが、全体として高水準の作品を揃え、さらに発展の可能性が感じられることから、確信をもつて一位に推した。二位は「片白草」とした。技量は確かであり、作品の充実において一位に迫る。身辺の風景から美を掴みとり、それを的確に表現している。とくに〈家壊す〉におけるキャタピラと董の配合、〈襟首に〉における的確な単純化に注目した。三位は「生きていて、いいの？」。文語の使い方に習熟していないところがあるが、障がいをもつ生徒と向きあいながら心動かされた瞬間を鋭く切りとっている。

一首の完成度とともに、二十首という単位で何を伝えるか。そこに注意しながら二十篇を読んだ。